

Title	家族構造の歴史人口学的研究
Sub Title	Population and family in early modern Japan
Author	岡田, あおい(Okada, Aoi)
Publisher	
Publication year	2018
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2017.)
JaLC DOI	
Abstract	<p>本研究は、宗門改帳を史料とし、ここからデータベースを構築し、徳川後期の農民世帯の家族構造を明らかにすることが目的である。本研究で用いる史料は、東北日本2地域(会津山間部4か村・二本松平野部3か村)と中央日本2地域(美濃平野部6か村・信州山間部2か村)である。結果的には、当初予定していたデータベースの完成には至らなかった。データベースの完成にはまだ時間を要するが、完成度の高い東北日本の一農村のデータを用いて、徳川後期農民社会の家族構造を解明するための基本的指標の分析を試みた。</p> <p>This study has two aims. The first is to build a large database using the Shumon Aratame Cho (SAC) (sect registries) as a historical reference. The second is to use this database to examine the structure of farm households in the late Tokugawa period.</p> <p>For this study, I used the sect registries of fifteen villages (seven in northeast Japan and eight in central Japan). Ultimately, I was unable to complete the database. Therefore, I attempted to examine basic indicators for determining family structure by using the data of a single farming community in northeastern Japan, as it had the most complete database.</p>
Notes	<p>研究種目：基盤研究(C)(一般) 研究期間：2014～2017 課題番号：26380697 研究分野：社会学</p>
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_26380697seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

平成 30 年 5 月 24 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26380697

研究課題名(和文) 家族構造の歴史人口学的研究

研究課題名(英文) Population and Family in Early Modern Japan

研究代表者

岡田 あおい (Okada, Aoi)

慶應義塾大学・文学部(三田)・教授

研究者番号：50246005

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、宗門改帳を史料とし、ここからデータベースを構築し、徳川後期の農民世帯の家族構造を明らかにすることが目的である。本研究で用いる史料は、東北日本2地域(会津山間部4か村・二本松平野部3か村)と中央日本2地域(美濃平野部6か村・信州山間部2か村)である。結果的には、当初予定していたデータベースの完成には至らなかった。データベースの完成にはまだ時間を要するが、完成度の高い東北日本の一農村のデータを用いて、徳川後期農民社会の家族構造を解明するための基本的指標の分析を試みた。

研究成果の概要(英文)：This study has two aims. The first is to build a large database using the Shumon Aratame Cho (SAC) (sect registries) as a historical reference. The second is to use this database to examine the structure of farm households in the late Tokugawa period. For this study, I used the sect registries of fifteen villages (seven in northeast Japan and eight in central Japan). Ultimately, I was unable to complete the database. Therefore, I attempted to examine basic indicators for determining family structure by using the data of a single farming community in northeastern Japan, as it had the most complete database.

研究分野：社会学

キーワード：家族社会学 歴史人口学 宗門改帳 直系家族 世帯構造 家 農民 データベース

1. 研究開始当初の背景

本研究の目的は徳川後期の農民世帯の家族構造を解明することである。

平成7年速水融を代表とする文部省科学研究費創成的基礎研究「ユーラシア社会の人口・家族構造の比較史研究」の立ち上げにより宗門改帳を史料に用いた世帯の研究が本格的に始動した。世帯(家族)構造、継承、相続、改名など徳川後期の家族、あるいは世帯に関する研究成果が続々と発表されている。研究は主に1か村、あるいはいくつかの村を合算した地域の宗門改帳を史料としているが、研究の積み重ねにより地域比較も行われるようになった。

世帯研究の成果によればそれぞれの地域に特徴はあるが、その基本的家族構造は直系家族である。しかし、筆者自身の研究を含め反省的にとらえると、1か村、あるいはある地域のデータから明らかになった結果を、一応地域的な限定をしつつも、徳川後期の農民世帯の特徴と一般化しがちである。この背景には、戦前から蓄積されている家研究の存在があり、その影響を強く享受し、徳川後期の農民社会は家システムに組み込まれているという言説を前提に、この言説の枠内で研究が進められてきたからだと考える。家研究は時期を明確には提示していないが、明治以降の家を対象とした観察に基づき概念は構築されている。この概念を徳川後期の農民社会の世帯の分析にそのまま当てはめることに疑問を抱くようになった。これまでの世帯研究は、成果を出すことが優先されるあまり、既存の家研究にとらわれすぎてきたように思う。既存の家研究にとられるあまり、見落としてしまった独自性が徳川後期農民世帯の家システムにはあるのではないだろうか。その独自性の発見こそが現在の世帯研究に必要なテーマといえるのではないだろうか。

斎藤修は「比較史上における日本の直系家族世帯」(速水融編著『近代移行期の家族と歴史』)のなかで、日本の直系家族と北欧・中欧の直系家族を比較し、日本の直系家族はその基底にあるシステムが異なると主張している。日本の場合は、北欧・中欧でも観察される世帯主が両親と同居するタイプと、北欧・中欧では観察されない世帯主が結婚した子どもと同居するタイプの直系家族が観察される。この点を根拠として斎藤は日本の直系家族には合同家族(type of joint family)とも核家族型とも区別される、異なる基底の家族システムが存在する、と主張している。本研究は、この主張をヒントに、日本の家研究を念頭に置きながらも、少し距離をおきながら、徳川後期の家族構造を解明する分析枠組みを提示し、これを解明したいと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、徳川後期農民世帯の家族構造を解明することを目的とし、データベースを

成する。史料には東北日本2地域(会津山間部4か村・二本松平野部3か村)と中央日本2地域(美濃平野部4か村・信州山間部2か村)の宗門改帳を用いる。大量データのデータベースを構築することが第一の目的となる。データベースは、個人を単位とした分析、世帯を単位とした分析、村を単位とした分析、地域を単位とした分析ができるよう構築する。データベース完成後は、基本的な人口指標を提示し、世帯を単位とした分析を試み、世帯構造のメカニズムを分析する。次に村を単位とした分析から世帯間のネットワークを明らかにし、家族構造を解明する。

これまで宗門改帳を用いた世帯研究は1か村、あるいは1地域のデータを利用して行われてきた。そもそも、大量データを用いた徳川後期農民社会の世帯構造の研究は数えるほどしかない。データベースの構築には非常に多くの時間とマンパワーを費やさなければならぬが、データベースさえ完成すれば、地域的広がりのある、時間軸を広げた世帯研究、さらに家システムの解明が可能になるのである。

3. 研究の方法

主に4つの柱を立てて研究を進めることを計画した。

(1) 先行研究の整理

家族社会学並びに歴史人口学の先行研究、さらに研究対象地域の地方誌を整理し、家族構造の分析に必要な指標の確認を行う。

(2) 史料の検討

宗門改帳と基礎シート(BDS)さらに文献資料をつき合わせ、各宗門帳、および各村の特徴を明らかにし、利用可能な情報の整理を行う。

(3) データベースの構築

これまでに作成したデータベース作成マニュアルにしたがってデータベースの構築・データクリーニングをおこなう。地域比較を考慮し、指標と変数を作成し、地域別分析のためのフラットファイルも作成する。本研究の中心となる作業である。

(4) データ分析

データ分析をどのように行うか、分析のデザインを明確にする。データベース完成後、この分析デザインにしたがい、分析を開始する予定であったが、実際には、研究期間中にデータベースが完成しなかったため、完成度の高い村のデータを用い、プリテストの形で分析作業をおこなった。分析方法は、以下のとおりである。

世帯の分析

(a) 世帯数・世帯規模等の基本指標を明らかにする。

(b) 修正ハメル・ラスレット分類を用い、世帯構成の特徴を見出す。

(c) 修正モデルを用い、世帯構成の2項間移行を観察し、サイクルの分析を行う。

個人のライフイベントの分析

- (a) 基本的な人口指標の観察
- (b) 個人の続柄の観察（地域によって表記が多様であるので、修正をする）
- (c) 個人のライフイベントと世帯構成の関係分析
世帯間のネットワーク分析（結婚・養子縁組・奉公といった世帯間移動に着目）

4. 研究成果

本研究は、宗門改帳を史料とするデータベースを構築し、徳川後期農民社会の家族構造を解明することが目的であった。本研究期間は、データベースを構築する中で、検討すべき問題にぶつかり、その解決に時間を費やした。具体的には、新たな村の宗門改帳をデータに加えるごとに遭遇する問題なのであるが、宗門改帳の記載方法が村によって異なり、その確認作業をおこなわなければならなかった。また、本研究でデータベース化を予定した村には長期にわたる欠年があり、この欠年をどのように扱うか、10年程度世帯員が不在の留守世帯をどのように扱うかなどの検討を必要とした。このような理由から、すべての村に共通する指標作成を再検討しなければならなかった。いくつかの課題をクリアするために、これまで構築したデータベースの部分的修正（美濃平野部4か村）をおこなうなど、本研究期間はデータベースの構築というステップにとどまり、完成には至っていない。当初の目的を果たすことができなかったその一因として、マンパワー不足があげられる。当初予定していた研究補助員の都合がつかなくなり、協力を仰げなくなり、その補充がつかなかった。入力作業は高度の専門知識を必要とするため、人材確保が今後の大きな課題である。データ入力に予定より大幅に時間を費やしているが、漸次完成にむけ作成されている。データベース構築の進捗状況は以下のとおりである。

【データベース完成・データクリーニング続行】

・会津山間部4か村・二本松平野部3か村

【データベース修正中】

・美濃平野部4か村

【データ入力中・未入力を含む】

・美濃平野部2か村・信州山間部2か村

上記の作成中のデータベースの中から、データクリーニング中ではあるがかなりデータベースの完成度が高い二本松平野部南杉田村のデータを用いて、家族構造を解明するための基本的指標について分析を試みた（現在データクリーニング中のため、分析結果の数値は現時点のものであり、今後修正される可能性がある）。この村の分析を試みた理由は、これまで研究代表者が取り組んできた村々とは異なる特徴があるためである。

「陸奥国安達郡南杉田村御人別改帳」は1678（延宝6）年から1870（明治3）年まで

の193年間、150冊分が残存している。南杉田村は、福島県中通り北部、東北本線南杉田駅から本宮駅の方向に少し南下した阿武隈川の支流杉田川下流南岸に位置する。南杉田村は奥州街道に沿って街並みが形成され街道に面しているかないかで、町と在の二手合（配下）に分けられ、それぞれ大内民右衛門、安斎伝兵衛という二人の名主によって支配されている。本研究で用いる「人別帳」は安斎家所蔵の史料であり、観察は南杉田村の在分となる。

観察期間中史料にはのべ248世帯が登場する。観察初年の世帯数は42世帯、留守世帯1世帯を加え43世帯であった。世帯数は増加傾向を示し、1687（貞享4）年には観察期間最大の94世帯（現住世帯79、留守世帯15）を記録し、その後小幅な増減を繰り返し、1720（享保5）年ごろから減少が始まる。この現象は観察最終年の1870（明治3）年まで続き、観察最終年の世帯数は46世帯（留守世帯なし）になる。

平均世帯規模は、奉公人を含めた場合が4.5人、親族のみの場合が4.2人であった。

修正ハメル・ラスレットモデルを用いて世帯×年を単位に世帯構成を分類した（ $N=9048$ ）。その結果、単純家族世帯の割合が最も高く、33.7%、これに続くのが直系家族世帯の31.9%であった。これを二本松平野部2か村（下守屋村・仁井田村）の世帯構成と比較すると、二本松平野部2か村では直系家族世帯の割合が最も高く36.5%であったので、南杉田村の世帯構成の分布は二本松平野部2か村とは異なる。また、南杉田村の特徴として単独世帯の割合が高いことが明らかになった。単独世帯は11.1%であり、二本松平野部2か村の8.1%をかなり上回る。

南杉田村には約200年間の間にのべ248世帯が登場したがこの間存続し続けた世帯は11世帯にとどまり、100年以上存続した世帯を含めても52世帯、全体の21.0%であった。この村の特徴は、世帯の移動の激しさに求められる。観察期間の前半は他村からの転入、そして他村への転出が多く、特に転入した世帯が南杉田村にとどまらず、数年でこの村を転出することが明らかになった。このように転入、転出の激しい特徴を持つ村の世帯のサイクルを観察する意味があるのかどうか、検討の余地を残した。また、本研究では二本松平野部として下守屋村・仁井田村に南杉田村を合算し世帯構造の分析を行う予定であったが、下守屋村・仁井田村とは異なる特徴を持つ南杉田村を合算してよいものかさらなる検討が必要になった。そこで、個人のライフコースの観察を行い、二本松平野部2か村との比較を行うことにした。

本研究では、戸主のライフコースに絞って観察を行った。その結果、戸主の約95%が男性であり、女性は戸主にならない（なれない）ことが明らかになった。この女性戸主の割合の低さは、二本松平野部2か村と比較すると

かなり低く、特記すべき事項である。南杉田村の50歳代の男性の8割以上が戸主を経験していた。会津山間部や仁井田村では前戸主生前中の譲渡には多様な続柄のものが観察できたが、南杉田村では生前譲渡の場合婿の割合が高くなるくらいであった。直系親族の男性は30代半ばで戸主になり、約20年強戸主を務め、50代後半で次世代と交代する。この戸主のライフコースは、会津山間部、あるいは二本松平野部の2つの村との大差は見いだせなかった。

南杉田村の世帯に関する観察はあくまでパイロットスタディーであるが、この観察から近隣の村をまとめて地域的特徴を提示することにどれだけの意味があるのか、という疑問が生まれた。むしろ、研究は焦らず、データベース完成後、当初は、東北日本と中央日本という2地域に分類し、家族構造に共通する特徴を見出すことを目標としたが、各村々の人口と世帯の基本的指標を提示し、それぞれの村の特徴を明らかにしたうえで、慎重に各村の基本指標を比較検討すべきであると考えようになっている。

研究地域の拡大という点においては、本研究最終年に、千葉大学名誉教授故佐々木陽一郎氏が作成された飛騨高山の約100年に及ぶ宗門改帳から作成された基礎シートが氏のご遺志により岡田研究室に移された。この基礎シートは、数少ない近世都市の宗門改帳から作成されたもので、歴史人口学にとって貴重な資料である。この基礎シートは劣化が激しく、早急に整理、保存作業をおこなう必要に迫られた。本研究では、史料の発掘も研究計画の一つに含まれているため、データ入力作業を一時中断し、高山の基礎シートの整理、保存を優先させた。シートの整理作業を終え、基礎シートには欠けているシートがあること、また内容にも不備があることが判明し、原史料である宗門改帳と突合せが必要になった。マイクロフィルム(麗澤大学歴史人口学・家族史アーカイブ所蔵)は1960年代に制作されたもので劣化の恐れがあるとの指摘を受け、マイクロフィルムをデジタル化した。デジタル化したマイクロフィルムと基礎シートを突き合わせ、欠けているシート、および記載内容の不足を確認した。その結果、現在歴史人口学の標準となっている基礎シートを作成する必要があると判断し、佐々木氏作成の基礎シートを参考にしながら、その作業準備を始めた(本研究期間終了後作業開始予定)。

本研究期間はデータベースの構築に時間を費やし、データ分析及び研究成果の公表には至らなかった。データベースの完成にはまだ時間を必要とするが、この成果は数年の間に著書として発表する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

岡田あおい、近世農民世帯の構成と戸主のライフコース 陸奥国安達郡南杉田村の戸主改帳を用いて、法學研究、査読無、第90巻第1号、2017、pp.91 - 117

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計1件)

岡田あおい他、弘文堂、現代家族ペディア、2015、359(6-8)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡田 あおい (OKADA, Aoi)
慶應義塾大学・文学部・教授
研究者番号：50246005

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()